が流れ出して露出し、野犬に荒らされると聞いたので、少しでも深く掘ろうと汗を流した。入ソ以来、故国日本の土を踏むまでは死ねないと言っていた同胞、ソ連のさまざまな不条理にもじっと耐え忍んで頑張って来られたのに、その望みも果たせず、さぞかし悔しかっただろうと述懐する。

狂瀾のまにまに

石川県　寺西次作

一、無線通信兵から幹候へ

大東亜戦争もたけなわの昭和十九年三月末、召集令状を受けた。当時私は、金沢市近郊の内灘村大根布国民学校に奉職していた。新任教師として一年経った時であった。

四月一日に東京世田谷の近衛野戦重砲隊へ入隊しなければならない。取りあえず下宿先の後始末だが、当時は宅急便もトラックもない。もちろん自家用車もなくて、自分で背負って帰るより仕方がなかった。

東京には私も父も行ったことがなく、叔父と三人で上京した。初めての東京の町はただ驚くばかり。人々に聞きながら、まず二重橋前へ行って皇居を遙拝。今度は世田谷の部隊近くで宿を求めねばならない。どこを訪ねても旅館は満員。途方に暮れていた折、通りがかりのおばさんの親切で、一晩ご厄介になれたが、お守り袋を頂き、部隊まで見送ってくれたご一家の名前は「黒田圭蔵」。あれから五十年を経た現在もあのお守りを身につけているが、黒田さんを捜し当てる手がかりはいまだにつかめない。

入隊して一週間経つか経たぬかの深夜、起こされて完全軍装。渋谷駅から乗車してどこも知れず発車、列車は全部鎧戸をおろしたまま着いたのが下関。海を渡り朝鮮を北上して、着いた所が新京であった。

落ち着き先は新京南嶺にある関東軍固定通信隊であった。集まった初年兵は北海道から沖縄までの寄せ集め、口論などすると外国語を聞いているようだった。

演習は歩兵訓練と通信訓練であった。通信は電鍵を

叩いての「トン・ツー」であるが、幸い私は成績が良かったので無線通信手に選ばれた。通信兵の中では一番待遇がよく、重い機材を背負って走ることもなかったから、肉体的にも苦しい思いをしなかった。

三カ月の教育が終わると、初年兵は次々と全満の各部隊へ転属して行き、私もついに七月十五日、トルチハの電信第一八連隊に転属した。トルチハは、チチハルや興安嶺を越えた西北満の、ソ連との国境近い所である。広野の中にポツンと建った兵舎で、時々「泣き人」が号泣してゆく中国人の野辺送りを見たり、夜中、軍馬を襲いに来るオオカミの遠吠えを聞いたりした。

腸チフスになって隔離された兵隊の看病を命ぜられたとき、病人が手当ても行き届かず頭のてっぺんからつま先まで南京虫に食われて腫れ上がっているのを見て、怖じ気づいた。病人が死ぬと、一晩屍衛兵として立たされ、翌日は近くの山上で雑木を集めて荼毘に付したが、トルチハの思い出は気味の悪いことばかりであった。

九月には北朝鮮との国境近くの間島の電信第三七連隊へ転属した。先にいた部隊が南方へ行った後に、全満から集めた編制部隊であった。ここで、「近く幹部候補生の試験があるから受験せよ」ということで、毎晩消灯時間から勉強を始めた。幸い第一次の試験に合格して幹候になり、次に甲種、乙種を分ける試験でも甲種合格三名のうちに入り、やがて奉天の北陵にある関東軍通信教育付となった。

ここで最後の仕上げ教育を受けて見習い士官となり、姫路の部隊に赴任すると聞いていたから、毎日が張り切りボーイそのものであった。

あと一カ月という八月七日、突如ソ連軍の侵攻!!教育も打ち切られたが、原隊へも帰るに帰れず、奉天に留まって抵抗することになったが、間もなく敗戦。玉音放送を通信機で受信して、男泣きに泣いた。

二、中亜カザフ共和国へ

敗戦後の奉天市街の混乱、邦人の老若男女が随時随所で受けつつある略奪や暴行、殺傷が……、地獄絵図の一端を見せつけられて、我々は座視するに忍びず、近くの昌平街地区の警備に就いて、中共八路軍との銃

撃戦も度々行った。ソ連軍の投降勧告も無視して、八家子という山中に逃避して天幕露営を送った。二週間余りの交戦を経てようやく奉天に帰った。全満各地から各部隊が続々と集結して来たが、小学生の遠足帰りのように疲労し切った表情で、かつての皇軍部隊の威容は見られなかった。九月一日、我々も武装解除を受けて軟禁される。山と積まれた軍刀や銃剣、命の次に大事な兵器を手放したときは涙が止まらなかった。

そのころは、シベリアへ強制抑留されるとはだれも思ってもみなかった。ソ連兵の口にする「トウキョウ、ダモイ」と信じ込んで、持てるだけの荷物を背負って奉天の近郊皇姑屯を出発したのは、九月十四日だった。乗車のとき、私は第三十九大隊（山下信夫大佐）の本隊とはぐれてしまい、今までの戦友の大半と離れ離れになってソ連領へ入る羽目となった。

列車のダイヤは実に漫々的で、半日も一日も停車しているかと思うと、二日も三日も突っ走る。北満の黒河からブラゴエシチェンスクに渡ってシベリアの土を踏んだのは十月十五日、ここで一週間も天幕生活をする。寒さが身にこたえたが、乗車の順を待つのである。

一車両に六十名から八十名が二段に詰め込まれて北へ北へと進んだが、いつの間にか西方に向いているのに気がついた。このときほど大きなショックを受けたことはない。

シベリアの曠野は広かった。行けども行けども地平線は向こうへ逃げて行くばかりである。

列車の走る所、日本人が連行された形跡が続いていた。それは沿線に残された用便の跡である。ソ連兵は紙で拭くことはしなかった。

カラガンダに下ろされたのは十一月八日。貨車の旅は二カ月、すっかり衰弱した上に、重い装備を背負い、歯を食いしばって歩いた。

はるか前方に真っ黒なピラミッドが幾つか見える。そのうち、やっと正体が分かってきた。「ボタ山だ。我々の行く所はここだなあ」

収容所に着くと同時に、やっとの思いで背負って来た荷物は全部その場で没収されてしまった。私はここでもまた十九大隊と別れてしまい、一人で第九収容所

に回された。

カラガンダへ来た日本人は、健康な者はほとんどが石炭掘りのため坑内にぶち込まれた。

町の人口は十万人余り、旧樺太の日ソ境界線と同じ北緯五十度、海抜千五百メートルの高原地であるから、冬の寒さは格別であった。

この地方は年中ほとんど雨は降らず、水は極めて貴重品であった。一般家庭用水は限定されていて、毎朝、切符とバケツを持って給水所で列をつくっている姿をよく見かけた。

我々も一日にコップ一杯の水しかもらえず、まず一口を口に含んで、少しずつ吐き出して顔を洗うのである。コップ一杯の水はまさに血の一滴に等しかった。住民の家は屋根も壁もすべて泥で塗り固めたものであり、我々のバラックも地中に穴を掘って屋根を作り、その上に土を盛り上げたモグラ兵舎であった。降雨の多い日本だったら、またたく間に泥が流れ落ちてしまうであろう。

夏は六月から八月までの短期間、雑草も五センチほどに伸びて小さな花をつけるともう冬を迎えるという状態で、日本のように春、秋はなく、短い夏から長い冬へ一足飛びの状態であった。夏は午前一時半ころにもう東の空が白々と明るくなり、夜は九時、十時までまだ明るかった。時計を見ても就寝しても、夜寝ている感じがせず、昼寝でもしている感じであった。その反対に、冬は朝九時半ごろにやっと夜が明けて、午後二時過ぎにはもう夕暮れのように薄暗くなる。全く短い夏と長い冬だけしかない極地の世界だった。

こうした地理的にも気候的にも単純、殺風景な世界に耐えて生きているソ連人に比べて、山川草木、海もあり、春夏秋冬、変化に富んだ天地に恵まれた日本を思うと、本当に日本に生まれたことを感謝しなければならぬと、つくづく思ったことである。こうした悪条件の下で我々の抑留生活が始まった。

三、炭坑へ入る

炭坑作業は三交代八時間労働である。現場に着くと一日のノルマが与えられ、それが完了しない限り、八時間過ぎても帰してくれなかった。朝出てから夕方帰

るまで水一滴与えられず、作業中は休憩もなく、ぶっ続けの八時間労働であった。八時から四時までの一番組は、収容所に帰ると小おけ一杯の湯で炭塵を拭き取る程度の入浴。午後六時過ぎに昼食にありつき、八時過ぎに夕食ということになる。二食分続けてやっと食事を取ったという感覚を持つのである。野菜類の摂取がないから、我々は現場への往復の道で名もない雑草をむしり取ってポケットに詰め、食事のスープに細かくちぎって浮かして食べた。これが唯一のビタミン補給であった。また草のなかに二十日ネズミのような野ネズミがいたので、棒で叩いて捕らえ、腹わたを捨てて、ペーチカの上で丸焼きにしてむしり食べたりもした。たばこは住民の捨てた吸い殻を素早く拾って、まわし飲みをする。まさに餓鬼の明け暮れであった。

明日は一週間に一日の休日と、やっと毛布の中に潜り込んだと思うと、叩き起こされ全員集合。戸外の夜間作業に引っ張り出されて、山と積まれた坑木の貨車下ろしや粉炭の山の整理など、厳寒零下四〇度、暗闇の中の作業は、全く泣くに泣けなかった。そうかと思うとトラックに乗せて遠い石山へ行き、一日中トラックに石積みの仕事をさせられる。その石も二人か三人でやっと転がせる大石ばかりだから、これも油断すると危険な作業だった。その使用トラックが満州から奪って来た日本軍の十輪車の日産トラックだから、一層腹が立った。

それでも青空の下の作業は、坑内組にとって少しは心も晴れる思いであった。

四、不思議な現象

二年目から私は立坑作業に就いた。地下何百メートルの坑道に垂直に掘り下げて、坑木などの資材をケーブルで送り込むためのもので、十数名の作業班である。身分証明書を持って、警戒兵なしの自由行動で出掛けるので、種々いい目にも遇った。時々大きな石炭塊を抱いて住宅へ持って行き、熱いミルクや柔らかい白いパン、パピロスという巻きたばこにありついた。ソ連人の一人一人は本当に素朴で、大陸的なおおらかな心を持っていた。温かい人情に触れる機会を得たことも忘れられぬ思い出である。

もう一つ不思議な体験があった。二十二年の夏だったが、青く澄んだ西の中空に、上下左右に一つずつ太陽の虚像が写っているのである。保育園の遊技室の壁に、赤いお日様の絵を張りつけてあるように、はっきり眼に映って、しばし棒立ちになっていた。

カラスは黒いものと思い込んでいたが、北満やシベリアでは目に触れるカラスはみな真っ白である。鳴き声、形態は正真正銘のカラスであった。

世の中には絶対これに間違いないと断言できることはないのではないか、と思ったが、これも一つの人生勉強のように思えた。

二十二年の九月十五日は、私は三八度以上の熱が出て、やっと痔病が認められて、ゲルマン（ドイツ人）の病院に入院して手術を受けることになった。ドイツの軍医大佐（院長）の執刀で手術を受けた。この病院は、入院患者も病院で働いている兵隊もみな、ドイツ、ルーマニア、ポーランドなど第二次大戦の俘虜たちであった。日本人は私を入れて三人が入院していた。

病室は二段ベッドの寝台で、私の下にはドイツの大尉がいた。無口でいつも読書にふけっていたが、彼はあるとき私に言った。

「ヤポンスキー（日本人）よ。日本は立派だ。最後までよく戦った。我々は日本人を尊敬している。しかし、ドイツも必ず立ち直ってみせる」

私の真向かいにはルーマニアの少佐がいた。年は少し取っていたが、ドイツ人に比べると落ち着きもなく、多弁で程度がやや落ちた。日本に彼女がいるか、自分には彼女が待っているから早くダモイしたい、と終始女の話だった。

そんな中で一カ月入院して、痔もすっかり良くなり、収容所へ帰る日も近いと思っていたところ、十月十一日、私は病院から直接、病人として帰国することになった。

五、思いがけぬ帰還

第九ラーゲルの戦友たちに別れのあいさつもできず、帰国の列車中もだれも面識がなく、一人旅同然でナホトカに着いたのは十一月七日であった。道も川もすべて凍っていたが、日本の戦車の何倍も大きい重戦車や

大型トラックが川の上を行き来しているのには、ただ驚くばかりである。十日間の天幕生活にふるえながら、ひたすら引揚船の来るのを待った。

毎日「総括」とかいう集会が開かれた。共産主義教育に洗脳された若い連中が、引揚者名簿の中からこれはと思う反動人物を引き出して、大衆の面前で「つるし上げ」にするのである。

散々酷使されて死の一歩手前から生き残って来た同胞に、罵詈雑言を浴びせて体罰を加える。アクチブ連中こそ、鬼畜にもまさる獣だったと思う。病院から単独で帰ってきたことが幸いしてか、私は無事に「総括」を免れて、真っ青に晴れたナホトカの岸壁の引揚船「白竜丸」に乗船できたのは昭和二十二年十一月十七日であった。

満三年十カ月、その間全く音信不通だった私が舞鶴から打った電報に、両親はどんなに狂喜したことか。

私にとっても大切な兄は、既に終戦の二十年二月、フィリピンで戦死していたのである。残された兄の妻と三児、私は消息不明のまま、一家は全く灯の消えたような沈んだ毎日を送っていたようである。

私は十日ほど休養して、十二月から早速、河北郡大根布小学校へ復職した。そうして四十年近く、一家の平和のために兄嫁と結婚することが最も妥当と決心して、第二の人生を出発した。二人の結婚に後悔したことはなかった。私にも三人の子供ができて、計六人の子どもを育てながら、先祖から受け継いだ二町三反の田地も、ほとんど妻一人で守り続けてくれた。

妻が五十七年八月、不幸にも不帰の客となった。私は目の前が真っ暗になったように、大きな心の打撃を受けた。

人生とは、いろいろなことに出会わなければならぬものだということを痛感した。その最も大きなものは、妻の死と戦争であった。最愛の妻を失った悲しみは言葉に尽くせないが、これはあくまで個人の問題である。それに引きかえて、戦争は人類全体の問題である。戦争ほど人類を不幸のどん底に突き落とすものはない。

戦中、戦前の人々は年と共に姿を消していくが、私たちの先祖や先輩の方々が身を捨ててつかみ取ってき

たこの平和を、いつまでも守り続けて、この地球上に二度とあのような残酷物語が展開されぬよう、努力していただくことを願って止まないものである。

ジプシーのごとく
――アジア大陸流転の六年――

石川県　垣内　久米吉

全満を渡り歩いたジプシー部隊

私は昭和十八年十一月、金沢の工兵連隊に応召し、三日後には出発。満州東北部の国境の町、東寧（牡丹江省東寧県）に送られたが、頼みの受入れ部隊が既に移動して〝もぬけの殻〟、また冷蔵庫のような貨車に詰め込まれて北上、アムール川（黒龍江）を挟んだソ連と対峙する北の果て、黒河市にほど近い山神府という町に辿り着いた。迎えてくれたのは雪の中から屋根だけが顔を出した三角兵舎で、心細いことといったらなかった。

そもそも私たちの部隊は、通称満州三六一九部隊、正体は関東軍司令部直轄の第四七野戦道路部隊という工兵の特殊部隊であった。北信越地方から集めた、大方は三十歳を過ぎた年配の補充兵ばかりで、戦闘を主目的とせず、十字鍬、円匙（シャベル）、爆薬などを携行して、ご用命に応じて大陸を渡り歩くジプシー部隊であった。事実、終戦の日までの一年十ヵ月の間に、東寧を皮切りに六ヵ所も移動した次第は次のとおりである。

山神府で三ヵ月の基礎教育を受けた後、いよいよ本業開始の地は、大興安嶺山脈の中間にあって、北満最寒の地帯といわれ免渡河。ここで作戦用道路の建設に三ヵ月。次は南満州の鉄都、鞍山に移り、米空軍による第一次爆撃で鞍山製鋼所へぶち込まれた二百五十キロの不発爆弾数百発の後始末であった。この後は西満州の要衝、通遼（興安南省）である。ここでは西に広がる砂漠地帯を貫く道路の補修作業で、最後は外蒙古との国境アルシャン（阿爾山、興安北省）であった。

谷間の森で伐採作業を続けていた八月八日、九日の